

記憶の橋を架ける

特集

戦後80年、平和への誓いを新たに 記憶の橋を架ける

終戦から80年を迎える今年。年月の経過とともに、その時代を生きた人たちの数は確実に減少の一途をたどり、戦争の記憶はだんだんと過去のものになりつつあります。

世界に目を向けると、今なおさまざまな国や地域で紛争が起き、私たちが当たり前のように享受している平和で豊かな生活とは程遠い生活を強いられている人が数多くいます。現代でも「平和」は当たり前のことではありません。今一度立ち止まり、改めて平和について考えてみませんか。

本特集では、戦時中の日本や本市で起こった出来事について、改めてその恐ろしさや悲惨さ、人々の苦しみや悲しみの記憶を伝えるとともに、私たちがこれからも平和の尊さを忘れないための取り組みや、若い人たちの平和への思い、歴史資料館特別展など市の取り組みについて紹介します。

◎問い合わせ

秘書広報課 ☎ 23-3174
文化財課 ☎ 23-9547
福祉課 ☎ 23-0963

※タイトル背景は、本市出身の日本画家・大野重幸が都城空襲直後の明道小学校を描いたスケッチ。当時、ありあわせの画材で描いたと伝えられています

経済不況と暮らし

昭和5年頃、日本は昭和恐慌と呼ばれる深刻な経済不況に陥ります。本市でも、企業や工場などの倒産や休業が相次ぐとともに、従業員の賃金低下や未払いが起き、多くの失業者もみられました。

さらに、天候不順や風水害の影響で農業面でも苦しい局面を迎えた日本が、経済不況の打開や資源を国外に求めた結果、昭和6年に満州事変が起こります。これを機に日本は戦争へと大きく歩みを進めました。

移り変わるまちの様子

昭和9年、本市では市民総がかりの労働奉仕作業によって飛行場が完成。都城飛行場と呼ばれ、軍だけでなく、民間も利用していました。

また、昭和10年になると昭和天皇による陸軍特別大演習が本市で実施。本演習にはさまざまな準備が必要で、開催地の本市は大きな影響を受けたことが分かっています。

戦争のはじまりと暮らし

昭和12年、日本は中国との全面戦争に突入。召集を受けた人たちは、駅などで家族や知人からの出征祝いを受けながら、戦地へ向かいました。

一方で、婦人会や学校が中心となり、前線を物資供給などで支える「銃後の守り」と呼ばれる活動が盛んになり、国民全員で「戦争」を戦う意識が生まれていきます。

物資の統制も始まり、生活必需品は切符制による交換が行われ、本市でも食料品から衣料品まで幅広く対象になりました。また、戦地で利用する装備の充実のため、金属製に代わり陶製の製品が作られるなど、代用品と呼ばれる日用品も普及します。物資不足により、残された国民は耐え抜く暮らしを強いられました。

空襲と特別攻撃隊

本市は、昭和20年の都城西飛行場への空襲以降、終戦までの間大きな被害を受けています。この頃の本市には飛行場が3カ所あり、さらには特別攻撃隊も配備されていたため、空襲の標的にされていました。

本市から出撃した特別攻撃隊は79人。18歳から30歳の若者たちでした。彼らは、国のため家族のためと戦地へ飛び立っていきました。昭和20年4月から7月の間に、都城西飛行場から2回、都城東飛行場から15回の計17回にわたって出撃しています。

戦前・戦時中の主なできごと

- 昭和4（1929）～1930年 ●世界恐慌・昭和恐慌により世の中が不景気になる
- 昭和6（1931）年 ●満州事変が始まる
- 昭和9（1934）年 ●多くの市民の勤労奉仕により、都城飛行場が建設される。後に都城西飛行場と呼ばれる
- 昭和10（1935）年 ●昭和天皇が都城で陸軍特別大演習を統監
- 昭和12（1937）年 ●日中戦争が始まる
- 昭和13（1938）年 ●「国家総動員法」公布
- 昭和14（1939）年 ●第二次世界大戦が始まる
- 昭和15（1940）年 ●都市中でも切符制・配給制が始まる
- 昭和16（1941）年 ●「国民学校令」により従来の小学校が「国民学校」に改称。戦時体制に即応した教育が行われる

- 昭和18（1943）年 ●食糧事情が深刻化。学童も授業を中止し食糧増産活動に励む
- 川崎航空機株式会社工場建設に伴い、試験用として都城東飛行場が建設開始。翌年、完成する
- 昭和19（1944）年 ●米軍による沖縄への攻撃が本格化
- 国民学校初等科以外はほとんど勤労奉仕作業をして過ごす
- 都城飛行場を陸軍が接収する
- 沖縄から都城への集団疎開が始まる

- 昭和20（1945）年 ●都城北飛行場が建設される
- 都城から79人の特別攻撃隊と61人の援護隊が出撃（4月～7月）
- 都城市域が空襲を受ける（3月～8月）
- 8月6日 都城大空襲で市街地が大きな空襲を受ける
- 8月6日 広島に原子爆弾投下
- 8月9日 長崎に原子爆弾投下
- 8月15日 ポツダム宣言受諾。日本は無条件降伏する
- ※都城のできごとは、都城市史、山之口町史、高城町史、山田町郷土史、高崎町史を参考に作成

●世の中のできごと、●都城のできごと

80年前、都城中学2年生だった濱田邦彦さんは、昭和20年8月6日の都城大空襲を鮮明に記憶しています。「低空を飛ぶ米軍機※グラマンのパイロットの顔はつきり見えました」と語り、当時をこう振り返ります。



昭和7年生まれ
濱田 邦彦さん(93歳)

「突然の爆撃で自宅の外井戸は屋根が落ち、木製の洗濯桶の外側が熱風で焦げ、菜園の茄子が焼け茄子になるのを横目に必死で避難しました。屋前から午後まで続いた空襲で町一帯が炎に包まれ、焼け野原と化しました。翌日、牟田町の自宅に戻ると景色が一変していて、隣接するお寺の本堂は焼け落ち、まだ火が燦る町の中に、西都城駅が見えたことを覚えています」

都城西飛行場で特攻機の出撃を見送った記憶もあるという濱田さん。自宅からは、いつ飛ぶか分からない若い隊員たちが白いマフラーをなびかせた飛行服姿で、近くの料亭に入入るのが見えたといいます。後年、宴に同席した人から「自分が飛ぶときは翼を振るよ」と言い残し、確かに翼を振って飛び立つ機体がい

た」と聞いたーそんな話を、忘れられない記憶として語ってくれました。終戦を聞いた時は「少年だったので負けた悔しさのようなものがあった」と語る濱田さん。民間人を無差別に殺した沖縄戦や広島・長崎への原爆投下を強く批判し、「戦争を体験した者として毎年夏が来ると平和とは何かを考えます。物の豊かさⅡ平和ではない。平和を考えることは人間の本质を問うことで、突き詰めれば正しい道徳観・倫理観・世界観を持つことです」と話します。

※グラマン：第二次世界大戦中、アメリカ海軍が使用した戦闘機の通称

「防空頭巾をかぶり、雑嚢を下げて、サイレンが響き渡る中を必死で走りました」と話すのは、80年前高崎国民学校の2年生だった永崎郁子さんです。本市でも空襲が続いていた昭和20年のある日、友人と2人で家路を急いでいた永崎さんは、米軍機の接近を告げるサイレンを耳にします。「早く、早く」と走っていると、頭上に暗い影が落ちたんです。隣を走る友人に今すぐ隠れるよう言われ、2人で道路の脇に積まれた材木の影に身を隠しました。その時、私たちの背後に広がる田んぼに向かって、米軍機が機銃掃射してきたんです。恐る恐る見上げると、低空飛行する米軍機に乗る兵士の顔がはっきりと見えたのを今でも覚えていますよ」と永崎さんは80年前の忘れられない出来事を話してくれました。

当時、家が農業を営んでいたという永崎さんは、戦時中の暮らしについてこう振り返ります。「当時、今では考えられないような貧しい生活をしている人たちが本当にたくさんいました。取るものもとりにあえず、命



昭和12年生まれ
永崎 郁子さん(87歳)

からがら疎開してきた人たちは特に、その日の食べ物にも困るような生活だったんです。誰もが自分と家族のことだけで精一杯だった。着るものもなかったあの時代に、自分たちの着物の帯をほどこいて、防空頭巾を作ってくれた母たちには本当に感謝しかありませんね」

※高崎町史によると、昭和20年8月に高崎橋付近で荷馬車が米軍機の機銃掃射を受け、その後高崎新田駅や農業倉庫が攻撃を受けたことが分かっています

戦後80年、平和への誓いを新たに――

記憶の橋を架ける

つないでいく、

平和の願い



夏尾中学校で語り部活動をする常盤さん

語り継ぐ戦争の記憶

戦争体験を継承し、平和の尊さを子どもたちに伝えようと、7月8日、夏尾中学校で語り部による平和学習が行われました。

講師を務めたのは、山田町出身で語り部グループ「南の風」代表の常盤泰代さんです。講話では、戦争が起きた経緯や当時の軍国主義的な教育、都城大空襲の被害状況などを説明。また、常盤さんが当時の写真や戦争体験者の証言を紹介しながら、人々の暮らしや思い、戦争の悲惨さを語ると、生徒たちは真剣に耳を傾けました。

「私たちの権利にはどんなものがありますか」と問いかける常盤さん。生徒たちが「学ぶ、遊ぶ、食べる」などと答えると「その権利を一瞬で奪うのが戦争。あなたたちの大切な権利を守っていかけるよう、平和な世の中を作ってほしい」と平和な未来への願いを込めて、力強く語りかけました。

以下では、講話を聞いた生徒たちの声を紹介します。

戦時中の子どもたちの様子や教科書の話聞いて、私達と年齢に近いこともあり、「どんな気持ちだったのだろう」と想像すると怖くなりました。たくさんの権利が守られている今の私たちは恵まれていると感じました。



長井 叶羽さん(2年)

機銃掃射で多くの市民が犠牲になったと知り、つらい気持ちになりました。都城でも豊かな土地が軍事用の飛行場になって、悔しかったと思います。戦争は二度と起こしてはならないと思いました。



白谷 成志さん(1年)

出征した人が大事な人と二度と会えないことを当たり前と思う状況に、胸の奥が痛くなりました。多くの尊い命を奪う戦争は私たちにも近い出来事で、過ちを繰り返してはいけないと強く思いました。



高島 美海さん(3年)

戦争体験者の話を聞き、平和のありがたさを改めて実感しました。二度と戦争が起こらないよう今回の講話をしっかりと理解し、若い世代の私たちも戦争の悲惨さを周りの人に伝えていく必要があると思いました。



津曲 美咲さん(3年)

記憶の橋を架ける

左 / 遺書（大分県宇佐市教育委員会所蔵）都城出身・藤井眞治大尉が家族に宛てた遺書。疎開先として都城を勧める思いが記されている。 右 / 賜饌場配置要図 昭和10年の陸軍特別大演習に関する図面で、会場配置や都城駅からの経路が描かれている。



文化財課
主査
田中 滉太郎

本特別展では、戦中・戦後の都城の様子を伝えるため、初公開を含む多くの史料を展示しています。また、宇佐市教育委員会の協力により都城出身の特攻隊員に関する貴重な史料なども見ることができます。そのほか、寄せられた多くの戦争体験談を通して、当時の人々の思いや暮らしの一端をお伝えしています。戦争の記憶を受け継ぎ、平和について考えるきっかけとなれば幸いです。

●干甘諸供出の注意事項
ガソリンは血の一滴とも呼ばれるほど今日は大事ですこのガソリンに混入するアルコール原料となる甘諸を農家が出荷することは血の一滴を防ぐのですから一刻も早く割當された干甘諸を死力をつくして出荷して下さい。
本村は他町村より干甘諸の出荷が多いのでかれこれ不都合の点が多いです。お互いのためお國のために家族も総

動して急いで出荷の準備をしてお互いの務めを果たして下さい
○産業組合貯金利子支出
昭和十五年度左記種類の貯金に對し利子の支拂をいたしますから貯金者各位は貯金通帳を産業組合へ御提出下さい
記
一、組合員、家族、団体の當座貯金
二、組合員、家族、団体の据置貯金
三、組合員、家族の祖國振興貯金

上 / 火の見やぐら詰所 完成した中町第4班火の見やぐら詰所に地域住民が集合。戦時中は火災監視のため、住民が交代で詰めていた。
左 / 昭和十六年西嶽村報第二十號 西嶽村（現・美川町ほか）の公報。ガソリン用の干甘諸の供出を農家に求める内容が記載されている。

都城歴史資料館 特別展

戦中・戦後の 都城のまち・人々の暮らし

戦後80年の節目に当たる今年、都城歴史資料館では、戦中・戦後のまちの姿や人々の暮らしを伝える特別展を開催しています。空襲を受けた市街地や厳しい暮らし、出征する若者たちの思い。残された史料や戦争体験者のさまざまなエピソードに触れることで、戦争の記憶が年月を超えて私たちの心に迫ります。この機会に、「平和とは何か」を考える時間を過ごしてみませんか。

◎問い合わせ 文化財課 ☎23-9547

都城西飛行場被爆写真

特別展の概要

- 会期 11月9日(日)まで
- ※月曜日休館（祝日の場合は翌日）。
- 展示替休館9月9日(火)・10日(水)
- 開館時間 9時30分～17時
- ※入館は16時30分まで
- 入館料
一般220円（160円）、
高校生160円（110円）、
小・中学生110円（50円）
※（ ）内は20人以上の団体料金。
都城島津邸・高城郷土資料館・都城歴史資料館の観覧券半券を提示した人は団体料金適用。8月31日(日)までは小・中・高校生無料

関連企画 戦争体験談お話し会

戦争体験者の話を交えたお話し会を開催します。

- 日程 8月15日(金)・17日(日)、9月21日(月)、10月19日(日)
- 時間 14時～15時
- 会場 都城歴史資料館
- 費用 入館料が必要
- ※特別展や関連企画について詳しくは、市ホームページを確認ください



戦没者・空襲犠牲者合同追悼式

市では、都城大空襲のあった8月6日に合わせて、戦争で命を落とした人たちの冥福を祈るとともに、平和への誓いを新たにすると合同追悼式を開催します。

- 日時 8月6日(水) 10時～
- 場所 総合文化ホール



慰霊・平和記念の黙とう

- 〔広島市原爆被爆80周年慰霊・平和祈念〕
●日時 8月6日(水) 8時15分
- 〔長崎市原爆被爆80周年慰霊・平和祈念〕
●日時 8月9日(土) 11時2分
- 【全国戦没者追悼】
●日時 8月15日(金) 正午
- ☎福祉課 ☎23-10963

この夏、平和について考えませんか
おなかいっぱい食事を取れること。安心して眠りに就けること。明日もまた家族や友人と笑って過ごせること。現代の私たちにとって当たり前のことが、当たり前ではなかった時代があります。

80年前、都城のまちは空襲で炎に包まれました。
80年前、若者たちは都城から特別攻撃隊として飛び立ちました。
80年前、都城で多くの人が家族や友人を失いました。

もう二度と戦争を繰り返さないためには何が必要なのでしょう。
本当の意味での「平和」とは何なのでしょう。

終戦から80年目を迎える今年。失われた多くの尊い命に心から黙とうを捧げ、これから80年後、100年後の平和を願いましょう。
私たち1人1人が「平和」について考え続けることが世の中をより良い方向に変えていく。
私たち自身や子どもたちが生きる未来のために、この夏、平和について考えませんか。